川西民族走廊・チベット語方言における「ぶた」を表す語

鈴木博之

1　はじめに

チベット・ビルマ諸語における家畜の語彙体系を扱う研究にはいくつかある。たとえば孫宏開 (1989) や Ikeda (2004) の「馬」をめぐる研究が挙げられる。これらは各種言語での形式とその祖形を取り扱う議論である。その一方で記述研究においても語彙体系の記述として家畜名称を取り上げるものもある。チベット語では、周毛草 (2003:406-414) は rMachu（瑪曲）方言の家畜の語彙体系を記述している[1]。その際に語彙が豊富なのは、生活に密着した牛類（ヤクなどを含む)、羊類、馬類などである。チベット語をとってみれば、このような議論にぶたが扱われるのは、あまり見かけない。また、方言形式を複数対照させる手法をとる研究も未見である。

本稿では、従来あまり注目されなかったぶたの名称について、川西民族走廊に分布するチベット語諸方言を対象に具体的な語形式を明らかにし、加えて言語地図を作成して分布について分析を行う。

1.1　「ぶた」をめぐる語彙

先行研究において「ぶた」をめぐる語彙が取り上げられてこなかったのには、チベット文語（以下「蔵文」と書く）やチベット口語（Lhasa 方言）において、それに関する語彙があまり豊かでないことが挙げられうる。

蔵文における動物の「ぶた」を表す形態素は *phag* である[2]が、一般的に動物名として用いられる場合は、*phag* ではなく *phag pa* と２音節形式をとる。前者は「ぶた年[3]」の場合に用いられる形式とされるが、川西民族走廊の方言では基本的にこの１

[1] これは rMachu 方言がアムドチベット語牧民方言の一種であるため、その生活環境が家畜の語彙体系に反映されているということを分析している（周毛草 2003:60-62)。

[2] ここでいう蔵文は９世紀の第２次釐定以降のつづりをさす。それ以前のものは古蔵文と呼ぶことにするが、rNam-rgyal Tshe-ring (2001:299) によると古蔵文には「ぶた」に *pag* というつづりがあるとされる。ただしどの文献に現れるかは記述がない。古蔵文の時代のチベット語には有気と無気の対立が存在しなかったという説もあるが、この有気と無気の差異は本稿で問題になってくる。

[3] 日本語では「亥年」に当たる。

音節形式が用いられる。後者の形式は Lhasa 方言などに見られる口語形式と対応している。

動物の名称は、たとえば牛類の場合極めて豊富な来源を異にする語が存在する[4]。たとえば、*g.yag*「おすヤク」、*'bri*「めすヤク」、*mdzo*「ゾ[5]」、*khal ma*「荷物を運ぶ牛」、*glang*「おす牛」、*ba*「めす牛」などが見られる。「ぶた」の場合、このような豊富さはなく、ただ *phag* に他の形態素を加えて派生させる。たとえば「おすぶた」は *pho phag* または *phag pho* で *pho* は「男」を表す形態素である。「子ぶた」は *phag phrug* で *phrug* は *phru gu* などと関連がある「子」を表す形態素と分析される。このことはチベット語を用いる文化圏でぶたは重要な位置づけをされていない動物であったことをうかがわせる[6]。

さて、本稿で扱う方言の話される地域である川西民族走廊では、ぶたは一般的な動物であって定住地ではよく飼われている[7]。この地域は青藏高原と四川盆地など平地の間を中心として、高い山と深く険しい谷などの入り組んだ複雑な地形を形成しているが、高原より気候が温暖で、ぶたの生活に適した地域が多いことが指摘できる。この地域で話される川西走廊諸語を見てみると、ぶたをめぐる語彙はチベット文語より豊富である。そして、同地域に分布するチベット語方言に目を向けると、やはり複数の明らかに異なる語源をもつ形式が、「ぶた」という一般名称でくくられる対象の中のある種の意味区分によって使い分けられていることが観察される[8]。その豊富な語彙の来源は、概観するに、チベット語の本来語に由来する（語義の転用も含む）ものとともに、周辺に分布する非チベット語からの借用も考えられる。それゆえに、「ぶた」をめぐる語彙を取り上げて議論する必要性が生まれてくると考える。

---

[4]チベット文語において動物の性別をめぐる語構成は Beyer (1992:123-126) に言及がある。

[5]牛とヤクの子の名称である。

[6]栗田 (1987:34) はチベット族があまりぶたを好まないこととからめてチベットにおけるぶたの頭数が少ないという言及を行っているが、それは同書がチベット自治区に限った場合について述べているからであろう。筆者の観察では、川西民族走廊ではぶたの飼育は極めて一般的で、民家で複数で飼われていることが多い。日常生活と密接な関連があるため、ぶたを好まないチベット人を見かけるのはまれである。

ところで Stein (1962:5-6) によると、チベット南東部（ポウォ sPo-bo、コンボ Kong-po、タクポ Dwags-po）では早い時期からぶたが飼われていたと考えられ、最も古いチベットの年代記（６世紀）にもヤルルン地方でぶたを多く飼っていたと判断できる記述がある。さらにこれらの地域でぶたが日常的な動物であったと考えることができる習俗についても言及がある。これらの地域は川西民族走廊南部の西方に位置する地域で、本稿で直接扱う地域ではないが、ぶたがなじみのある動物であったことをうかがうことができるものである。

[7]ただし川西民族走廊北部では、一部当てはまらない地域がある。気候面で冬季の気温が飼育に適していない可能性もあるが、社会的な理由として回族が相当数居住していることも影響していると考えられる。

[8]しかしこれは、1.3 で述べるように、方言間で意味区分自体が豊富に分かれているのではなく、ほぼ共通と考えられる意味区分のもとに語形式の異なる語が豊富に見られるのである。

1.2　チベット語の方言調査

以上に述べた「ぶた」をめぐる語彙の豊富さが問題となるのは、そのような語彙体系を持つチベット語方言が未記述であって、広く知られていなかったことによる。チベット語は方言差異の非常に大きい言語で、その方言調査は中国国内に分布するものをとって考えてみれば、大規模な調査が行われ多くの研究がある[9]。チベット語の方言研究は、蔵文の存在もあって、直接歴史言語学的研究に貢献してきた（瞿靄堂 (1991) や江荻 (2002) など）。しかしながら、方言を用いた歴史的研究は、多くがチベット語全体の歴史すなわちチベット祖語から現代語への発展もしくはその逆を扱う巨視的な歴史研究である。ゆえに方言調査の地点の密度も決して濃くはなく、非常に地域性の高い俚言の類は言語学的に知られることはなかった。たとえば格桑居冕・格桑央京 (2002) では、カムチベット語は方言差異の激しいものであると述べているが、具体的にどの程度の差異が存在するのかについては十分に把握されているわけではなかった。筆者はこの状況を改善させるため、鈴木 (2006, 2007) で最新の見解を提示している。

ここで本稿の対象とする地域である川西民族走廊に分布するチベット語方言について、議論に必要な範囲で簡単に紹介しておく。川西民族走廊においてチベット語分布地域は、伝統的地域区分としてカム、アムドの２つに分けられる。現在の中国の行政区分（四川省、雲南省のみ）と対応させると、おおよそ以下のようになる。

1. カム
   甘孜州の大部分、木里県、迪慶州

2. アムド
   阿壩州北部、甘孜州色達県および石渠県

以上に述べた地域区分はしばしばチベット語の方言区分に流用されるが、必ずしも地域区分と方言区分とは合致しない。確かに川西民族走廊では、これらカム、アムド地域でそれぞれカムチベット語（もしくはカム方言）とアムドチベット語（もしくはアムド方言）が用いられているが、Sun (2003, 2005) や鈴木 (2006) など最近の言語学的研究によって言語学的類型がこれら２者と異なるものが指摘され始めた[10]。筆者はその一部分について「ヒャルチベット語」という名称で１つのグループにまとめているが、これはアムド地域のうち主に阿壩州北東部松潘県、九寨溝県、若爾

[9] Zhang (1996) が整理する方言の地点は、中国国内で行われた一斉調査（普査）を中心とする調査で対象となった方言であると思われる。

[10] 具体的な方言については鈴木 (2007:23-32) 参照。

蓋県の一部に分布する諸方言をさす[11]。以下の議論ではこれらの方言区分の名称を用いる。

さて、チベット語の方言が多様な特徴を持っているにもかかわらず、それがチベット語の方言である理由の１つには、多くの語彙が蔵文との音対応を見せ、各種方言間で多数の同源語を共有していることがある。本稿で扱う「ぶた」をめぐっては、方言形式のほとんどが蔵文 *phag* を含む形式と対応する。ところが、チベット語分布地域の中でも言語分布がもっとも複雑な川西民族走廊において方言調査を進めていくと、蔵文との対応関係をもたない形式が少なからず見出される。それらの形式がいったい何に由来するものであるかは極めて興味の大きい問題となる。

1.3　本稿の議論の方法と構成

本稿は川西民族走廊に分布するチベット語諸方言の「ぶた」をめぐる語の形式について、簡単な言語地図を作成しつつ、蔵文と異なる方言形式の分析を行う[12]。

本稿で言語地図を用いつつ分析するのは、一般名称としての「ぶた」、そして「おすぶた」、「めすぶた」、「子ぶた」の４つの語である。これは、調査時にこれら以外の「ぶた」について他の意味上の差異による語の区別が見られなかったことによる。具体的には、牛類の体系を参考にすると、色（黒、白、茶などがいる[13]）、模様（一色、一部分色違い、ぶち模様などがいる）、体型（やせているか太っているか）、子の有無、成長過程（年齢）における差異、去勢の有無などがあるけれども、調査においてぶたについては区別されているようには見えない。また、家畜か野生かで異なることがあるが、「ぶた」の場合、野生のものは「いのしし」を表し、チベット語でも「野生のぶた」という[14]が、本稿では扱わない。

議論の内容については、「ぶた」以外は語形式の多様性と分布、語源に関する議論を行う。「ぶた」は語形式自体の来源はほぼ等しいため、その音対応に注目して分析を加える。

---

[11] カムチベット語、アムドチベット語、ヒャルチベット語それぞれの具体的類型特徴については、鈴木 (2007:203-204) 参照。また、これらに分類しがたい特徴をもつ方言も報告されているが、ここでは特に触れない。

[12] この方法による分析は鈴木 (2007) において複数の語について行われている。

[13] チベット文化圏で飼われているぶたは、圧倒的に黒いぶたが多く、白いぶたに対してしばしばチベット語でも「白ぶた」のように表現することがある。逆に黒いぶたについて「黒ぶた」のように言うことは、色が問題になっているとき以外にはほとんどない。

[14] 蔵文では *phag rgod* で「ぶた」と「野生」からなる複合語である。筆者が調査したいずれの方言でも、この形式に対応する形式を用いるようである。漢語でも同様で、「猪」はぶたの意であり、「野猪」がいのししをさす。

2　形式および言語地図を用いた分布の分析

以下の議論に用いる言語地図について、記載される地点の情報を示しておく。ただし、調査によって地図化する対象の語を得られていない地域もあり、以下に示す全ての地点が各言語地図に反映されるとは限らない。

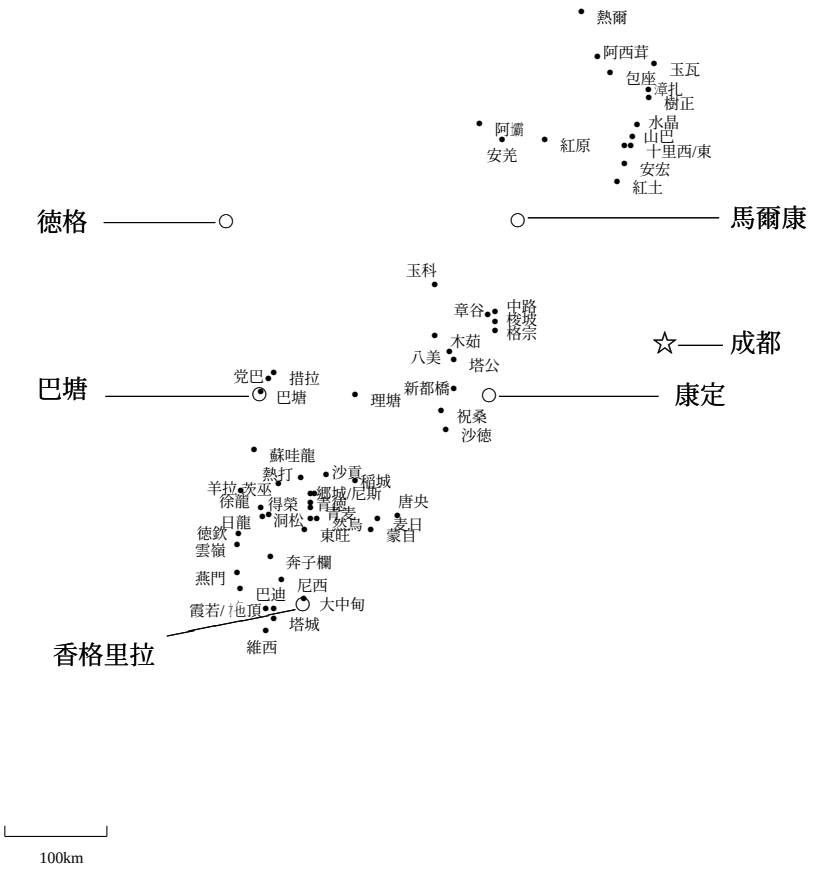

図 1: 言語地図に記載される地点（最大）

以上に示した地点名と方言名の対応は本稿末尾に示してある。

2.1　一般名称としての「ぶた」

一般名称の「ぶた」には、基本的に蔵文 *phag* 対応形式が用いられる。現段階では、接尾辞 *pa* を伴わない形式のみが確認されている[15]。

以下、初頭子音の形式と母音の形式に分けて、地図化した上で考察を加える。

[15]例外的なものに、Serpo 方言 ʔa gu「ぶた」がある（cf. Hongtu 方言などの「子ぶた」）。
また、華侃・龍博甲編 (1993:568) に青海省の Sogwo（河南）方言では「ぶた」を lu lu ということが記述されている。この形式は他方言で「猫」を意味する形式に酷似している。
ほか、Les Missionnaires Catholiques du Thibet (1899:621) には *phag ka* という形式も記述されている。口語由来の形式か。

2.1.1　初頭子音について

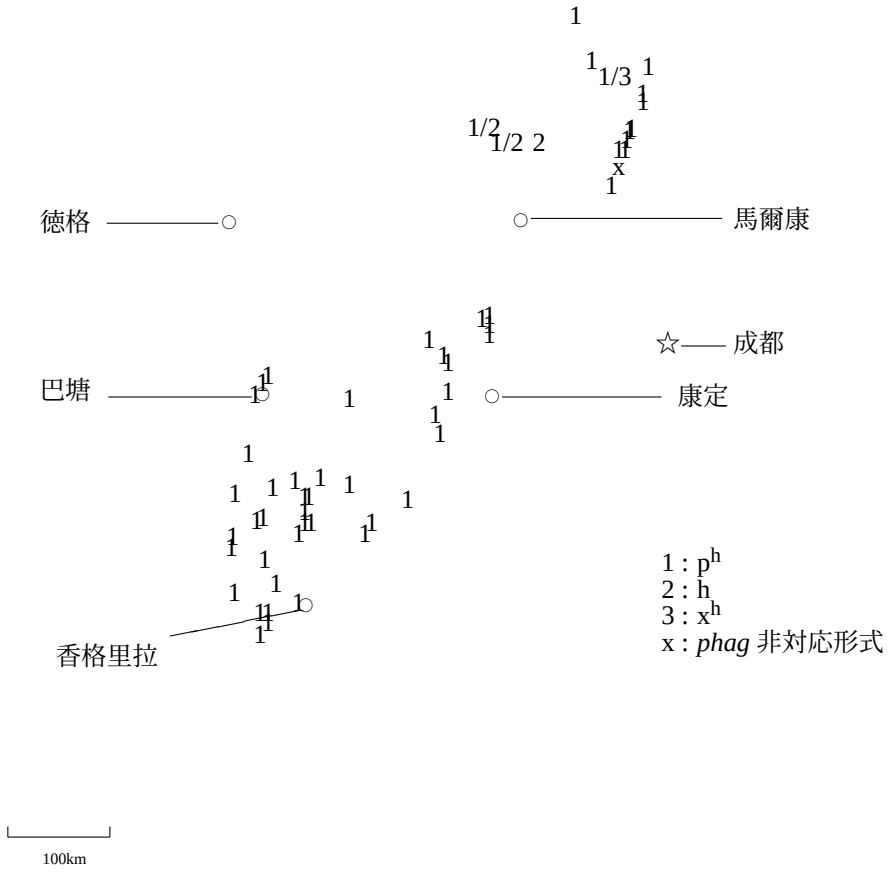

図 2: *phag* の初頭子音言語地図

広く両唇閉鎖音で対応する方言が見られる中で、アムドチベット語では両唇閉鎖音で現れないものがある。dMarthang 方言では haq のみが現れるが、rNgawa 方言では p^hɐq と hɐq が許容される[16]。同様の現象はヒャルチベット語 Babzo 方言にも見られ、p^hɑː と x^hɑːが許容される。それ以外のヒャルチベット語は、すべて両唇閉鎖音で現れている。

アムドチベット語で蔵文 ph が h や x, χ で現れるのは、方言及び語によって異なっていることが華侃 (1983) に報告されている。ただし、１方言内で語によってゆれがあるかどうかは述べていない。「ぶた」については、筆者の調査しえたアムドチベット語（青海省に分布するもの含む）では摩擦音で現れるものが通例であることを考えると、両唇閉鎖音の形式も並存する川西民族走廊のアムドチベット語がやや特徴的であると分析できる。

[16]ただし後者の hɐq は「ぶた年」の意味で用いられることが多い。

2.1.2　母音について

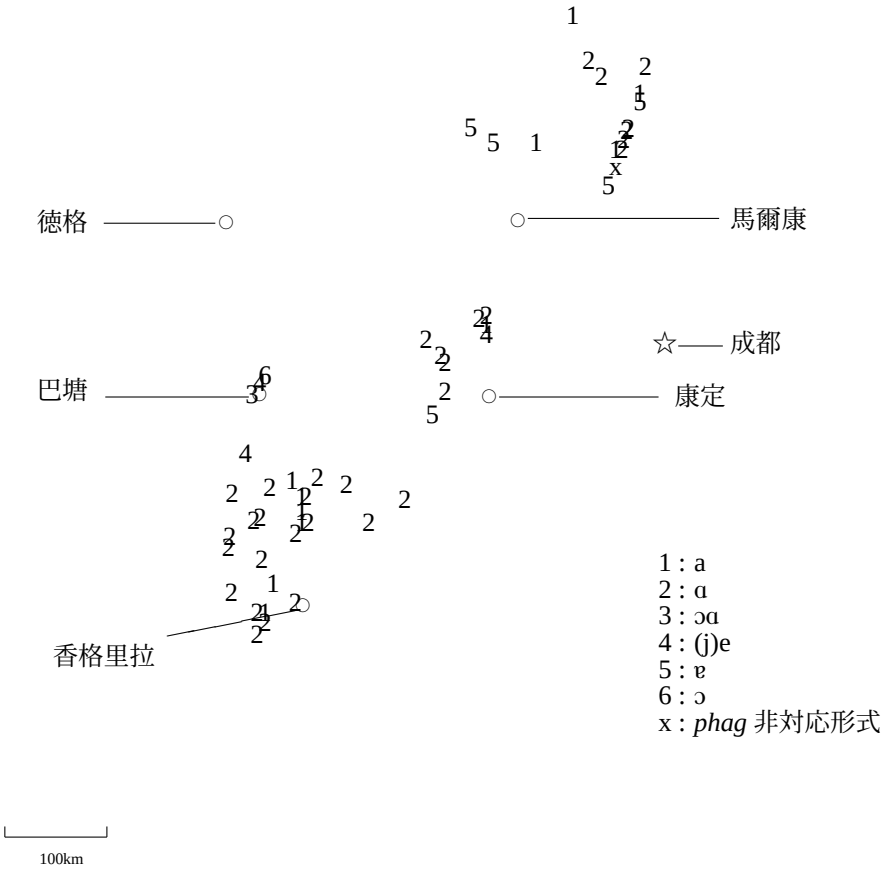

図 3: *phag* の母音言語地図

蔵文 ag 対応形式は、大きく/aʔ/となる方言と/ɑʔ/となる方言に分けられる。この両者の明確な分布上の境目は見出せず、個別方言に見られる独立した特徴であると考えられる。現段階の資料では、/ɑʔ/となる方言が多い。

その中で *phag* が˩pʰjeʔ となる地域に注目できる。この音対応自体が特徴的な上、分布がかたまっておらずばらけているのが分かる。dGudzong 方言や Sowanang 方言、Dangba 方言では、ほとんどの蔵文 ag 対応形式で/(j)eʔ, ɛʔ/が現れる[17]。Babzo 方言にも散発的にこの対応をもつ語があるが[18]、「ぶた」はそうではない。この対応は母音＋末子音の形式を取り扱う瞿靄堂 (1991) にも記述されていない、特殊なものである。

mBathang 方言˧pʰɔɑʔ の母音も特徴的であるが、これもまた同方言の蔵文 ag 対応

[17]ほかの例として、dGudzong 方言では˩ɛʔ bo「霜」（蔵文 *lhags pa*）や˧ʈʰeʔ「血」（蔵文 *khrag*）などのようである。

[18]たとえば˚neʔ「森」（蔵文 *nags*）、˚ʰtɕeʔ「鉄」（蔵文 *lcags*）など。

形式にほかならない[19]。

2.2　「おすぶた」

まず語形式の具体例を挙げ、語形式をタイプ分けし、そして地図を作成して分布の考察を加える。

2.2.1　語形式の具体例

この語について蔵文対応形式を使用する方言は比較的少なく、対応しない独自の形式をもつ方言が点在している。独自の形式には２通りあって、「ぶた」に相当する蔵文 *phag* 対応形式を含むものと含まないものである。

単純な蔵文対応形式：*phag pho / pho phag*

蔵文に対応する形式は、「ぶた」*phag* と「おす」*pho* の２つの形態素からなる形式で、方言によって *phag pho* もしくは *pho phag* というように配列が異なる例がある。現在での調査では、前者は２地点のみで確認されている。

1. *phag pho* 類
   sProsnang 方言`pʰɑʔ ʰɸʰu、sPomtserag 方言˜pʰɑʔ pʰu

2. *pho phag* 類
   rNgawa 方言 pʰo pʰɐq、Lhagang 方言`pʰo pʰɑʔ、Grongsum 方言˜pʰu pʰɐʔ、mBathang 方言`pʰo pʰɔɑʔ

この形態素の配列そのものがチベット語の方言特徴においてどれほど重要な差異であるかは考察の必要がある。その背景には、漢語で動物の性別を示す形態素が動物を表す形態素の前後どちらに来るかという点が方言分類指標になりうるとする研究（Norman (1988:182) など）があるためである。このような問題は川西民族走廊地域の方言に限らず、すべてのチベット語方言の資料を活用して考える問題であろうから、本稿ではこれ以上触れない[20]。

また、「ぶた」*phag* のみで「おすぶた」にも用いる方言がある。

---

[19]同じ方言を扱う格桑居冕 (1985) は p‘ɑʔ˥と記述している。調査年代を考えると、50 年程度の間の音変化か。

[20]方言の数のみではなく、さらに他の動物における性別差の表現についても形態素の配列が同じか否か調べる必要があるだろう。

Ketshal 方言：˚pʰaʂ　　Ragwo 方言：¯p̪ʰɑʔ

これらの方言には性別・親子の区別が存在しないのではなく、いわば「おすぶた」を無標として扱っているのかもしれない[21]。

pʰɑʂ wo 類

Askyirong 方言 pʰɑʂ wo にのみ確認される。第 1 音節は *phag*「ぶた」対応形式であるが、第 2 音節は来源不明である。

pʰaʔ jaʔ 類

Nyishe 方言ˆpʰaʔ jaʔ や Tacheng 方言´pʰɑʔ ja に確認される。第 1 音節は *phag*「ぶた」対応形式であるが、第 2 音節は来源不明である。

pʰa pʰɑʔ 類

rGyalthang 方言¯p̪ʰa pʰɑʔ にのみ確認される。第 2 音節は *phag*「ぶた」対応形式であるが、第 1 音節は来源不明である。Les Missionnaires Catholiques du Thibet (1899:621) によると、*pha phag / phag pha* に「去勢していないぶた」という記述がある[22]。

pʰɑːʔ ʈʰoʔ 類

sDerong 方言ˆpʰɑːʔ ʈʰoʔ にのみ確認される。第 1 音節は *phag*「ぶた」対応形式であるが、第 2 音節は来源不明である。

pʰɑʔ tʰʉʔ 類

Budy 方言（結義村）´pʰɑʔ tʰʉʔ / ´pʰje tʰʉʔ、（羅通村）´pʰjeʔ ʰtɯ / ´pʰje ⁿ̥tʰʉ や sKyang-tshang 方言 pʰeʂ ʰto に確認される。第 1 音節は *phag*「ぶた」対応形式であるが、第 2 音節は不明である。sKyangtshang 方言では、有気音を初頭にもつ音節が第 2 音節にくる場合に当該子音が前気音化することがあり、また Budy 方言の異なる村にお

[21]以上の方言で「めすぶた」「子ぶた」は異なる形式をとっている。

[22]Les Missionnaires Catholiques du Thibet (1899) の記述は迪慶州のチベット語方言の影響を受けているところがあるため、この記載事項が現在も rGyalthang 方言にのみ見られることは、調査時期が 100 年以上離れているとはいえ口語形式の中で関連づけられるだろう。ただし、現在の rGyalthang 方言では去勢の有無は語の差異に反映されない。

ける現われと関連づけられる。いずれの方言でも、第１音節は単なる「ぶた」の形式˚pʰɑʢとは異なる形式である。

pʰaʔ seː類

第２音節に seʔ がくる Sogpho 方言¯pʰaʔ ʰseʔ や Babzo 方言˚xʰɑː ʰsʰeːは蔵文 *phag gseb*「種豚」に対応する可能性がある[23]。Serpo 方言 pʰɑʢ ʰsu や Hamphen 方言 pʰɑʢ səwʔ もこの蔵文の対応形式と考えられる。

つまり、この形式は「おす」の意味を「種つけ」で表すという、一種の意味の転用である。

sʰe wa 類

Phyugtsi 方言˚sʰe wa にのみ確認される。この形式は蔵文 *sos ba*「繁殖する」に対応する可能性がある。この形式は Phyugtsi 方言の近隣に分布するペマ語において、「おすぶた」が pʰɑ^{53}sø^{13}uɑ^{35} となっていることが参考となる[24]。この形式の第２、第３音節に共通性が指摘できるだろう。ペマ語の sø^{13}uɑ^{35} は pʰɑ^{53}「ぶた」を修飾していると考えられるが、Phyugtsi 方言はそのような構造をとらないため、両者の語形式の構造は根本的に異なるかもしれない。

pʰo wa 類

郷城県の各種方言は、たとえば Sagong 方言で´pʰo wa といった形式を持っているが、語源はよく分からない。ただし、次に扱う「めすぶた」の形式と対比すると第１音節 pʰo は「おす」で、第２音節 wa は「ぶた」ではないかと考えられる。このとき「ぶた」の形式は、チベット・ビルマ諸語のうち羌語群やロロ・ビルマ諸語に見られる、すなわち非チベット語形式を用いていることになる。gTorwa 方言¯pʰo ɦɑ も、第２音節初頭が両唇接近音ではないが関連する形式であると考える。

「ぶた」が両唇接近音で現れる近隣の言語には、ダパ語 Ngwirdei（紅頂）方言-wa などがある[25]。

---

[23] この蔵文形式は華侃・龍博甲編 (1993:343) に記載されている。本来は bLabrang（拉卜楞）方言の形式か。

[24] ペマ語の形式は西田・孫 (1990) による。

[25] 郷城県とダパ語の分布地域は、言語接触を認めるうえで決して近いとはいえない。むしろ郷城県の歴史をたどるならば、納西語との接触が考えられるが、納西語の「ぶた」は bu^{42} であって、似た音形式ではない。

p^hɑː p^hwi ba 類

Branggo 方言˩p^hɑː p^hwi ba にのみ見られる。第１音節は蔵文 *phag* 対応形式であるが、後続音節は来源が不明である。

pə liʔ 類

dGudzong 方言˴pə liʔ にのみ確認される。第１音節が *phag*「ぶた」に近いように見えるが、同方言の「ぶた」は˩p^hjeʔ であって分節音の差が十分大きく、また複合語であるからといって第１音節の調音が弱化する現象は見当たらないため、関連は見出しにくい。

なお、無気音の「ぶた」は dGudzong 方言の近隣に話されるギャロン語に見られる。たとえば Bragsti（巴底）方言 pɑk、bZhilung（日隆）方言 pɑk などのようである。地域は異なるが、チベット語方言にもあり、Bragsum（巴松）方言[26]で pɐʔ[53] となる（瞿靄堂等 1989）。また、古蔵文にも *pag* というつづりがある（rNam-rgyal Tshe-ring 2001:299）[27]。

^{h}tsa ^{h}tsuʔ 類

Muli 方言ˋ^{h}tsa ^{h}tsuʔ にのみ確認される。来源はまったく不明である。

2.2.2　語形式のタイプの整理

以上に示した「おすぶた」の語形式を、そこに含まれる形態素を基準にタイプ分けし、語構成の類型を整理する。

1. 蔵文 *phag* 対応形式を含む
   - (a) 蔵文対応形式
   - (b) p^hɑɬ wo 類
   - (c) p^haʔ jaʔ 類
   - (d) p^ha p^hɑʔ 類
   - (e) p^hɑːʔ ʈ^{h}oʔ 類
   - (f) p^hɑʔ t^{h}ʉʔ 類
   - (g) p^haʔ seː類
   - (h) p^hɑː p^hwi ba 類
2. 蔵文 *phag* 対応形式を含まない
   - (a) s^{h}e wa 類

[26]西藏自治区工布江達県巴松措周辺で話される極めて特異なチベット語方言で、瞿靄堂等 (1989) は中央チベット語の１つと見る。いずれにせよ特別な基層をもった方言である。

[27]無気音の「ぶた」については、後の「子ぶた」の項も参照。

(b) p^{h}o wa 類

(c) pə liʔ 類

(d) ^{h}tsa ^{h}tsuʔ 類

以上を見ると、「おすぶた」の語形式には蔵文 *phag* 対応形式を含むタイプが多いことが分かる。*phag* 対応形式をもたないものの中には意味の転用と分析できる例（s^{h}e wa 類）があり、これと *phag* を組み合わせて用いると見られる例（p^{h}aʔ seː類）もある点で、両者の共通性が認められる。

2.2.3　言語地図を用いた分析

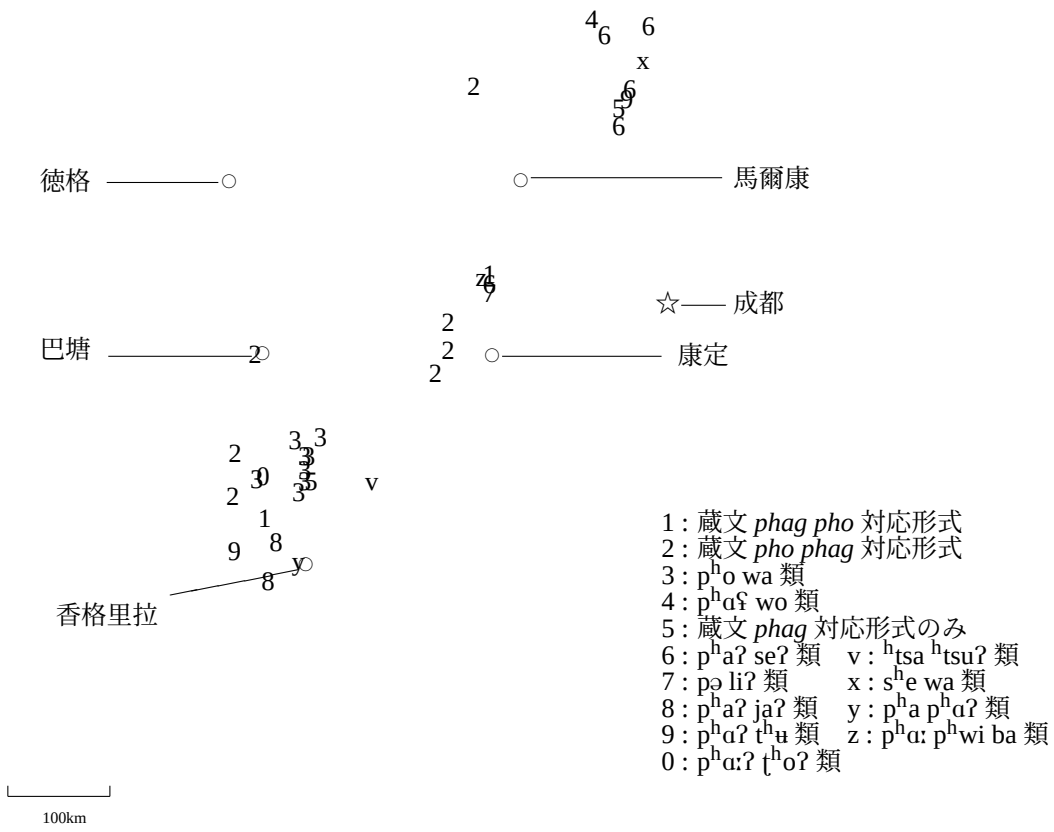

図 4: 「おすぶた」の語形式言語地図

得られた地点数の中で蔵文対応形式を用いる方言は、アムドチベット語およびムニャ地域（地図中「康定」の西にある ‘2’ のかたまって分布する地域を中心とする地域）のカムチベット語を中心とする地域に限られるように見える。

丹巴県の方言群はこの地域のみで独立した下位方言を形成する（鈴木 2006）が、それぞれ形式の異なるものを用いている。dGudzong 方言以外は蔵文と対応する形式

を含んでいて、表現上の差異と考える。

郷城県の形式は、ただ郷城県およびその隣接地域のみに分布する形式であることが分かる。

sKyangtshang 方言と Budy 方言は地域が離れているにもかかわらず、蔵文とよく対応しない似た形式を見せているのが、分布上際立つ特徴になる。ただし語形式上の特徴は、広域的な視点で見ると複数の地点で一致することが少ないことが分かる。

2.3 「めすぶた」

まず語形式の具体例を挙げ、語形式をタイプ分けし、そして地図を作成して分布の考察を加える。

2.3.1 語形式

この語は先の「おすぶた」と比べると、蔵文対応形式を使用する方言が多いが、対応しない形式にも複数のタイプが見られる。

単純な蔵文対応形式：*phag mo / mo phag*

「おすぶた」と同様に、蔵文に対応する形式は、「ぶた」*phag* と「めす」*mo* の 2 つの形態素からなる形式で、方言によって *phag mo* もしくは *mo phag* というように配列が異なる例がある。

1. *phag mo* 類
   Amphel 方言 pʰɑʢ mo、sKyangtshang 方言 pʰɑʢ mo、Ketshal 方言˚pʰaʢ mo、rNga-wa 方言 pʰɐq mo、sProsnang 方言´pʰɑʔ mo、dGudzong 方言´pʰjeʔ mu、Hamphen 方言 pʰɑʢ ɦõ[28]

2. *mo phag* 類
   Lhagang 方言´mo pʰɑʔ、Grongsum 方言´mo pʰɐʔ、mBathang 方言ˆmo pʰɔɑʔ

pʰaʔ ma 類

gTsangtsa 方言 pʰaʔ ma、Phyugtsi 方言 pʰɑ ma、Yungling 方言¯pʰɑː ma、Melung 方言¯pʰɑʔ ma のように現れる。この形式は「ぶた」*phag* に接尾辞として *mo* ではなく

[28]Hamphen 方言では、第 2 音節にくる蔵文 *ma* や *mo* に対応する要素が ɦã、ɦõと鼻母音化することが多く確認されるため、pʰɑʢ ɦõという形式は蔵文 *phag mo* 対応形式と分析できる。

ma が付加したものと考えることができる。いずれの接尾辞も「女性」を表しうるため特別な語形成ではないが、蔵文の構成法とはやや異なっている[29]。これについて、sPomtserag 方言では`pʰɑʔ ma とともに¯pʰɑʔ ´ʔa ma という表現も確認された。後者は「ぶた」＋「母」の複合語であると考えられる。このことから、pʰɑʔ ma のような形式はこの 3 音節形式の縮約と見ることもできるかもしれない。

以上に示した蔵文推定形式に基づいて、各方言の蔵文対応形式を参考にして考えると、sDerong 方言`pʰaːʔ mã、rGyalthang 方言´pʰɑʔ wãなどもこれに分類することができる[30]。

なお、Giraudeau & Goré (1956:295) は *phag ma* の形式に「子連れの母ぶた」という語義を与え、単なるめすぶたの意である *phag mo / mo phag* と区別している。この差異は、現段階での調査では確認できていない。

mo wa 類

Sagong 方言´mo wɑ と Phrengme 方言´mɔ wɑ は「おすぶた」の pʰo wa 類と対比できる形式を見せていて、第 1 音節が「めす」を意味し第 2 音節が「ぶた」を示している可能性がうかがわれる。

gTorwa 方言´mo ɦɑ も「おすぶた」の例と形態素の構成が平行的であり、関連する形式であろう。

jĩ mɑ 類

この 2 音節形式は Ragwo 方言´jĩ mɑ にのみ確認される。来源不明の形式である。また、それに *phag* 対応形式を前接させた以下に述べる形式が他の方言にも見られる。

pʰaʔ ji ma 類

Chaphreng 方言¯pʰaʔ ji ¯ma、Rwata 方言´pʰɑʔ jɑ mɔ などに見られる。ji ma 類とともに郷城県の諸方言に見られる形式である。Chaphreng 方言の声調の音声学的現れから考えると、pʰaʔ ji と ma に分解できるが、ji ma が 1 単位であるならば調査協力

[29]なお、おそらく bLabrang 方言も蔵文 *phag ma* の形式を用いていると見られる（華侃・龍博甲編 1993:343）。

[30]これらの方言の蔵文対応形式として、先に注記した Hamphen 方言と同様に、第 2 音節に来る *ma* や *mo* といった要素が口語形式では鼻母音化する。sDerong 方言ではˆṇĩ wã「太陽」（蔵文 *nyi ma*）や`ʰkaː mã「星」（蔵文 *skar ma*）などのようであり、rGyalthang 方言でも同様の例に´ṇi wã「太陽」、¬ʰka wã「星」のようになる。

者の言い間違いあるいは非口語（日常使わない）形式か、もしくは語源が理解できない程度に浸透、定着した語などの可能性がある。

いずれにしても、ji ma の部分は来源不明である。

jɑ mõ類

Muli 方言´jɑ mõにのみ確認される。来源は不明である。

p^hɑʔ jɯ ku 類

nJol 方言`p^hɑʔ ˆjɯ ku にのみ見られる。声調の音声学的現れから考えると、p^hɑʔ とˆjɯ ku に分かれうる。前者は「ぶた」であるが、後者の来源は分からない。なお、nJol 方言では「めすぶた」にˆmu p^hɑʔ も用いられる。

p^hi gɛ 類

Zhongu 方言 p^hi gɛ (Sun 2003:821) にのみ見られる。同論文も対応する蔵文形式をあげていない。

2.3.2　語形式のタイプの整理

以上に示した「めすぶた」の語形式を、そこに含まれる形態素を基準にタイプ分けし、語構成の類型を整理する。

1. 蔵文 *phag* 対応形式を含む
   - (a) 蔵文対応形式
   - (b) p^haʔ ma 類
   - (c) p^haʔ ji ma 類
   - (d) p^hɑʔ jɯ ku 類
2. 蔵文 *phag* 対応形式を含まない
   - (a) mo wa 類
   - (b) jĩ mɑ 類
   - (c) jɑ mõ類
   - (d) p^hi gɛ 類

「めすぶた」の語形式は「おすぶた」と比べて多様ではないが、蔵文 *phag* 対応形式を含まない形式は同数確認された。うち、共通する方言で「おすぶた」と語形式を同じくする構成をとる例（mo wa 類）がある。「めすぶた」の語形式が多くないのは、「おすぶた」と比べて蔵文対応形式を用いる方言が多いということが関わっている。

2.3.3　言語地図を用いた分析

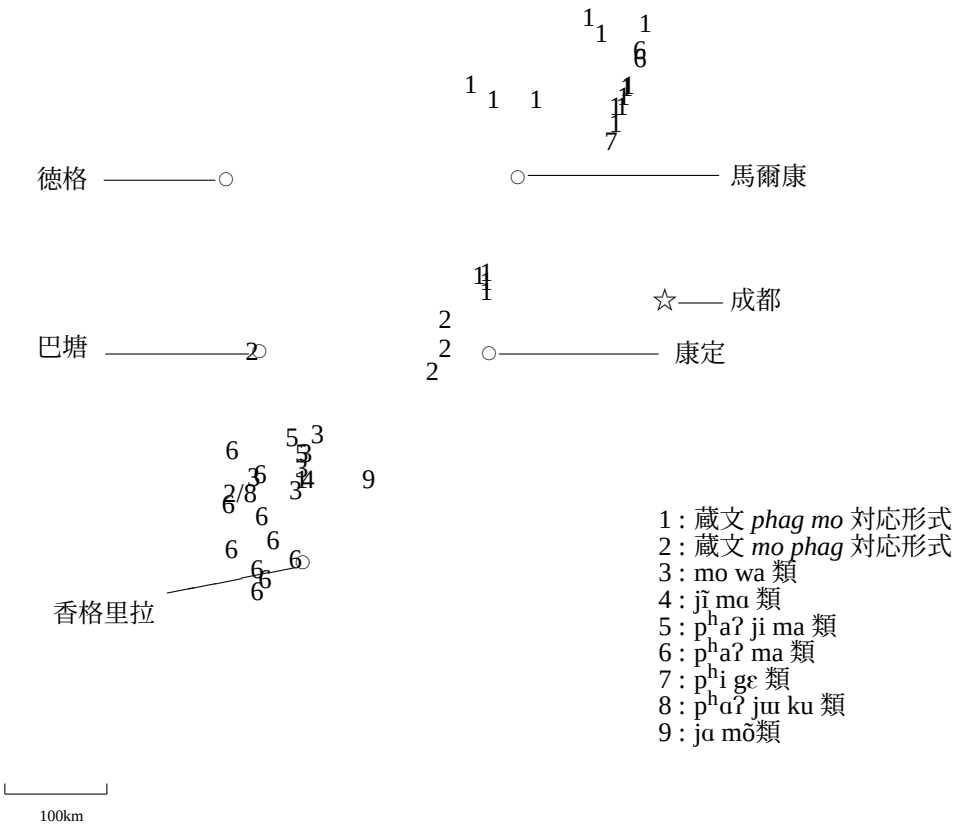

図 5: 「めすぶた」の語形式言語地図

蔵文対応形式を用いる方言はアムドチベット語、九寨溝県の方言群を除くヒャルチベット語、およびムニャ地域と丹巴県のカムチベット語を中心とする地域に見られる。ムニャ地域にかたまって *mo phag* 対応形式が見られる。この形態素の順序は、同地域の方言では「おすぶた」も同様である。

特徴的な形式は各地域に比較的かたまって分布しているが、郷城県では方言間で語形式に差異が見られる。また、九寨溝と迪慶州周辺に分布する方言で共通の形式を見せている。

「おすぶた」の地図と対照すると、蔵文対応形式を用いる方言が「めすぶた」の方が多いことが分かる。また、「おすぶた」は郷城県の方言でほぼ共通の語形式をもっているが、「めすぶた」は複数の形式が見られる。「おすぶた」は sKyangtshang 方言と Budy 方言のみが共通の特別な形式を持っているが、「めすぶた」は九寨溝と迪慶州周辺に分布する複数の方言についても共有していることが確認できる。

2.4　「子ぶた」

まず語形式の具体例を挙げ、語形式をタイプ分けし、そして地図を作成して分布の考察を加える。

なお、「子ぶた」とは子供のぶたであって、小さいぶたではない[31]。

2.4.1　語形式

先の「おすぶた」「めすぶた」以上に多様な形式がある。蔵文対応形式を使用する方言は少ない。

単純な蔵文対応形式：*phag phrug*

蔵文に対応する形式は、「ぶた」*phag* と「子供」*phrug* の２つの形態素からなる。形態素の配列は、１通り *phag phrug* が確認される。

たとえば、Ketshal 方言 pʰaʕ ʈʰuʕ、rNgawa 方言 pʰɐq ʈʰɯk、Lhagang 方言ˆpʰɑʔ ʈʰuʔ などのほか、gYagrwa 方言¯p̪ʰɑʔ ɖɯʔ も含まれる。

pʰɑʔ wo ʰtsə類

Rangakha 方言´pʰɑʔ wo ʰtsəの第３音節は、その近隣に分布するグイチョン語の動物の子供を示す形態素 tsi^{55} と似ており、グイチョン語の「子ぶた」は pha^{55}tsi^{55}tsi^{55} という（黄布凡主編 1992）。ほかに、ギャロン語 bZhilung 方言 pɑk tsɑʔ、同 Somang 方言の「子ぶた」pak$^{55/33}$tsa^{55}（厳木初 2006）の第２音節の形式などにも共通性が見られる[32]。

pʰje 類

香格里拉県に見られる形式、たとえば Nyishe 方言´pʰje といった形式は、dGudzong 方言などの「ぶた」¯p̪ʰjeʔ とは関係がないと考える。後者は蔵文 ag に対応する形式

---

[31] これにはいくつかの注意点がある。１つは、チベットのぶたは比較的体格が小さいこと、１つは漢語で子ぶたのことを「小猪」というように、小さいぶたという意も含んでいることなどがある。調査時の媒介言語の漢語では子ぶたのことを「乳猪」（乳飲みぶた）もしくは「猪的児子」（ぶたの子）という表現を用いているため、ここに述べた問題は発生していないと考える。

[32] なお、rDzayul（察隅）方言では´pʰɑʔ wu「子ぶた」があり、ここに述べた形式の第３音節のない形式と酷似する。

であり、音節末に声門閉鎖音が現れるが、前者はこのように分析できない。

p^hjeʔ γi 類

dGudzong 方言´p^hjeʔ γi や Branggo 方言´p^hɑʔ γi は、語形成の観点から「子供」´$ʈ^h$ə γi（蔵文 *phru gu*）と同一の構成で、「子ぶた」の蔵文は *phag*「ぶた」に指小辞 *gu* が付加された形式に対応すると考えられる[33]。この語形成の手続きは、mBathang 方言`$p^h$ɑː γɤも変わらない。ただし dGudzong 方言では第 1 音節が「ぶた」と変わらないのに対し、mBathang 方言では「ぶた」は`p^hɔɑʔ で形式が異なる。

なお、*phag gu* という形式は Les Missionnaires Catholiques du Thibet (1899:621) に記述されている。

p^hɐː ruʔ 類

Grongsum 方言¯p^hɐː ruʔ にのみ確認される。第 1 音節は「ぶた」*phag*、第 2 音節ははっきりと分からないが、「子」*phrug* の基字 ph の脱落した形式に対応する可能性がある。Giraudeau & Goré (1956:61, 223) に「子ぶた」の発音として pʼa rou（おそらく [p^ha ru] を意図している）がある。

p^hɔw γu 類

gZhungwa 方言 p^hɔw γu にのみ見られる。第 1 音節は「ぶた」*phag* に対応すると考えられるが、同方言の「ぶた」は˚p^hɑːであって、異なりがある。第 2 音節は指小辞 *gu* に対応する可能性がある。

p^he $ʈ^h$uʕ類

Amphel 方言 p^he $ʈ^h$uʕや Phyugtsi 方言˚p^heː ʈuːに確認される。第 2 音節は蔵文 *phrug* 対応形式である。第 1 音節は蔵文 *phag* と関係があると考えられるが、直接的に音対応の関係があるとはいえない。「ぶた」は p^hɑʕであるからである。

---

[33]指小辞 *gu* もしくは*'u* をつけて「子～」の意味をもつ語を派生させる例は *lu gu*「子羊」、*rte'u*「子馬」など複数例見られる。指小辞が付加されるからといって、小さい（愛らしい）ぶたという意味を意図しているわけではない。特に dGudzong 方言では、単に体格の小さいぶたに´p^hjeʔ γi を用いないことを確認した。

p^he jiː類

Phyugtsi 方言 p^he jiːや gTorwa 方言´p^he jiʔ に確認される。Phyugtsi 方言では p^he jiː と˚p^heː ʈuːが併用される。直前の例と同様、第 1 音節は蔵文 *phag* と関係があるとしても直接的な音対応を見せていない。「ぶた」は˚p^hɑːである。

p^hɑʔ ʈ^{h}ɑʔ 類

Tsiu 方言´p^hɑʔ ʈ^{h}ɑʔ にのみ確認される。第 1 音節は蔵文 *phag* の対応形式であると考えられるが、第 2 音節は蔵文 *phrug* 対応形式としては母音の対応が異なる。

p^hɑʔ lɯ 類

nJol 方言´p^hɑʔ lɯ、Budy 方言（結義村）´p^hɑʔ lje / ´p^he lje、（羅通村）´p^hje li などに見られる。第 1 音節は蔵文 *phag* の対応形式であると考えられるが、第 2 音節は来源が不明である。Budy 方言には複数の口語形式が見られ、その一部には第 1 音節が蔵文 *phag* に完全には対応しないものも含まれている。

p^hɯ k^ha 類

郷城県の諸方言に見られる形式で、Sagong 方言、Chaphreng 方言、gDongsum 方言、Rwata 方言で共通の´p^hɯ k^ha を用いる。加えて第 2 音節が無気音になる Sagong 方言´p^hɯ ka や、第 2 音節に前気音を伴う Nyersul 方言´p^hɯ ^{h}kəなども見られる。

puː類

sDerong 方言´puː、Zulung 方言´pə ɦu に確認される。無気音であるという点が特徴的である[34]。

語構成の観点から見ると、Zulung 方言の 2 音節形式が縮約したものが sDerong 方言の形式と考えられる。Zulung 方言の形式における第 2 音節の形式は、おそらく蔵文の指小辞 *'u*[35]に関連する形式と考えられる。

---

[34]参考として納西語 bu^{42}「ぶた」が挙げられるが、関連するかどうかは分からない。

[35]指小辞 *'u* は、たとえば *rta*「馬」に対して *rte'u*「子馬」などの例に見られる、生産性のあるものである。付加される際に、先行母音が変音することがある。

ただし、「ぶた」*phag* に対しては、末子音を伴っているため *'u* が直接付加されることはない。p^hjeʔ γi 類の項を参照。なお、「子ぶた」の初頭子音が無気音であるから、この点でそもそも蔵文と対応していない。

pɑ la 類

Yungling 方言´pɑ la にのみ確認される。直前の形式とともに、無気音であるという点が特徴的である。

pe ɖɤː類

sPomtserag 方言´pe ɖɤːにのみ確認される。直前の形式とともに、無気音であるという点が特徴的であるが、語形式自体は上述の pʰe ʈʰuʕ類に極めて近い。第 2 音節はおそらく蔵文 *phrug*「子」に対応すると考えられる。

ʔe ʈʰuʕ類

Thangskya 方言˚ʔe ʈʰuʕにのみ見られる。第 2 音節は蔵文 *phrug*「子供」の対応形式と考えられる。pʰe ʈʰuʕ類の語頭子音が脱落したものと考えられ、その代わりに声門閉鎖音が生じたと分析できる[36]。

go ɖiː類

Askyirong 方言 go ɖiːʔ、Babzo 方言˚goː di など若爾蓋県東部の方言に見られる。形式の細部には異なりが見られるが、いずれにしても来源は不明である。

ʔa gu 類

これに類する形式は松潘県熱務溝区で話される Hongtu 方言 ʔa gu、Zhongu 方言 ɐ gu にのみ確認される[37]。

この形式は周辺の非チベット語にも見られないもので、来源は不明である[38]。

ʔa ŋɯ 類

Serpo 方言˚ʔa ŋɯ にのみ見られる。来源は不明である。

---

[36]このことは、後に掲げる言語地図から pʰe ʈʰuʕ類が Thangskya 方言の近隣に複数分布していることを参考にした考えでもある。

[37]先に言及したように、Serpo 方言では一般名としての「ぶた」に ʔa gu を用いる。

[38]上述の ʔe ʈʰuʕ類のように第 1 音節を蔵文 *phag* 対応形式の初頭子音が脱落したものと考えることもできるだろうが、ʔa gu 類の場合は第 2 音節の来源もまた十分理解できず、このように考える根拠は極めて弱い。

その他

筆者の調査で現れなかったものとして、Giraudeau & Goré (1956:61, 223) に p′a li（[pʰa li] か）という形式が見られる。同書 p. 61 によると、雲南の発音であるという。nJol 方言´pʰɑʔ lɯ や Yungling 方言´pɑ la と似ている。それぞれの方言の分布は地理的には近いものである。

2.4.2　語形式のタイプの整理

以上に示した「子ぶた」の語形式を、そこに含まれる形態素を基準にタイプ分けし、語構成の類型を整理する。

1. 蔵文 *phag* 対応形式を含む
    (a) 蔵文対応形式
    (b) pʰɑʔ wo ʰtsə類
    (c) pʰɐː ruʔ 類
    (d) pʰɑʔ ʈʰɑʔ 類
    (e) pʰɑʔ lɯ 類
2. 蔵文 *phag* と関連する可能性のある形式を含む
    (a) pʰje 類
    (b) pʰjeʔ ɣi 類
    (c) pʰe ʈʰuʕ類
    (d) pʰe jiː類
    (e) pʰɔw ɣu 類
    (f) puː類
    (g) pɑ la 類
    (h) pe ɖɤː類
3. 蔵文 *phag* とは関連のない形式
    (a) pʰɯ kʰa 類
    (b) ʔe ʈʰuʕ類
    (c) go ɖiː類
    (d) ʔa gu 類
    (e) ʔa ŋɯ 類

「子ぶた」の語形式には、「おすぶた」と「めすぶた」よりも多くのタイプが見出される。中でも蔵文 *phag* 対応形式を含むと完全に断定することができないが極めて *phag* に近い関係にある形態素を含むものが複数見られる。特に母音が広母音でないもの、初頭子音が無気音のものの 2 種類に大別できる。

2.4.3　言語地図を用いた分析

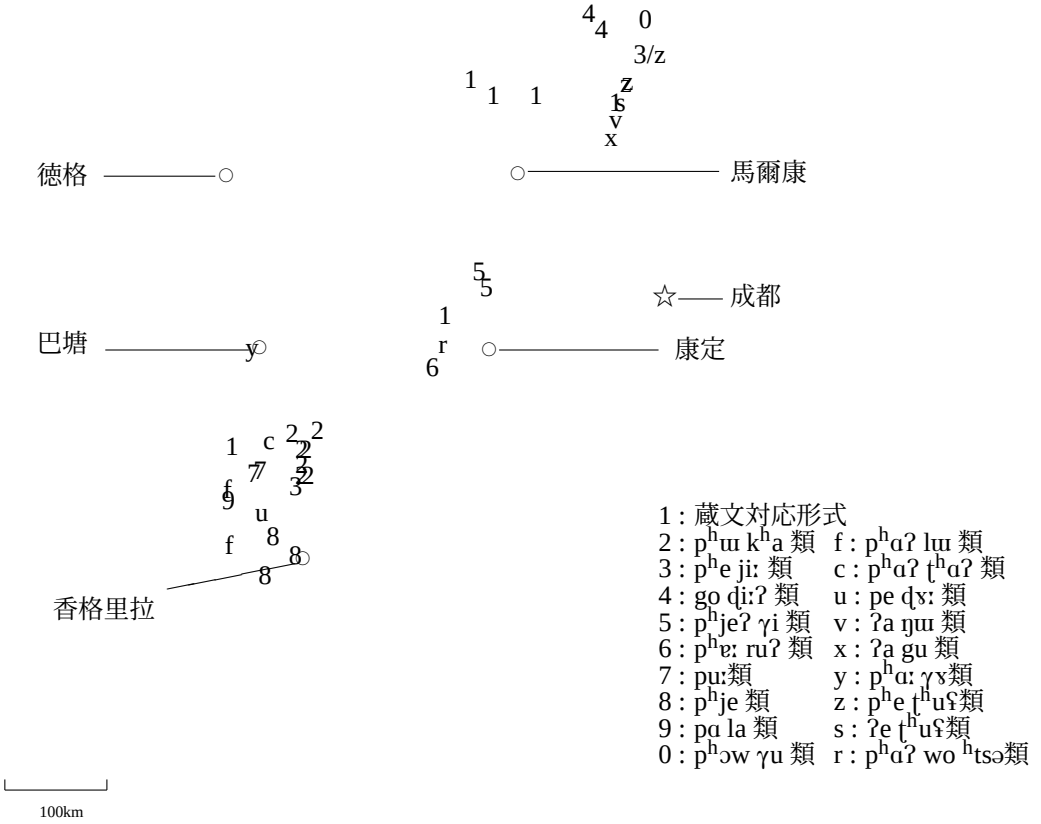

図 6: 「子ぶた」の語形式言語地図

蔵文対応形式はアムドチベット語にまとまって見られるほか、Ketshal 方言、Lhagang 方言などにあって、分布として散在している。

郷城県（図６:‘2’）では共通の形式を用いている。若爾蓋県巴西区の方言群（図６:‘4’）は音形式の差はあるが共通の特徴をもった語を用いる。これら以外は、さまざまな形式が点在し、あまり共通性を見せていない。その中で、無気音が現れるという特徴で考えるなら、sDerong 方言´puː、Yungling 方言´pɑ la、sPomtserag 方言´pe ɖʂːなどの３種類があって、いずれも本稿で扱う地域の南部に見られる点で共通する。

先の「おすぶた」「めすぶた」と比べると、アムドチベット語では蔵文対応形式が通例用いられているといえる。郷城県の方言群では他の地域の方言とは異なる形式を各方言で共有していることが指摘できる。ムニャ地域では、「子ぶた」については方言間で一致を見ない。「子ぶた」については、分布から際立った特徴を見出すのは難しいが、その中で無気音 p を含む形式が得榮県、徳欽県などに集中して見られる点は、当該地域に限られた分布と分析してよいだろう。

3　まとめ

本稿では「ぶた」に関する語彙として、「ぶた」のほか「おすぶた」「めすぶた」「子ぶた」の４語を取り上げて、川西民族走廊に分布するチベット語方言を中心に、それぞれの多様性のある具体的な形式を明らかにし、その語形式の類型を整理し、また言語地図を作成してその分布について考察を加えた。

その結果、以上４語の中で語義に基づく下位区分の差異はほとんど確認できず、各種方言の語形式がそれぞれ異なり、蔵文対応形式とは関連のない語が多く存在することが分かった。分布の面では、「ぶた」以外の３語について、議論の対象とする地域の中でもっとも北と南に位置する地域に分布する方言の中に蔵文と合わない形式を持つ方言が多く、またアムドチベット語は蔵文とよく一致することが示された。

「ぶた」は基礎語彙であるが、蔵文や Lhasa 方言にはあまり多くの語源を異にする形式が存在しない。しかしながら、川西民族走廊のチベット語方言を取り上げてみれば、アムドチベット語の各種方言では *phag* を含む蔵文に対応する形式を用いるほかは、本稿で取り上げた「おすぶた」「めすぶた」「子ぶた」で来源を異にする形式が用いられ、それらの一部については語形式上の特徴を見ると川西走廊諸語との関連を強く示唆するものも含まれていることが分かった[39]。

参考文献

栗田靖之 (1987)「チベットの自然と人」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』10-43 冬樹社

鈴木博之 (2006)《九香線上的藏語方言對比研究》第４届両岸三地藏緬語族語言學學術專題討論會發表論文

―― (2007)『川西民族走廊・チベット語方言研究』京都大学博士論文

西田龍雄・孫宏開 (1990)『白馬譯語の研究　白馬語の構造と系統』松香堂

Beyer, Stephan V. (1992) *The Classical Tibetan Language*, State University of New York Press

Giraudeau, S. E. Mgr & Père Françis Goré (1956) *Dictionnaire français-tibétain (Tibet oriental)*, Adrien-Maisonneuve

[39]Stein (1962:5-6) には、チベット北部ではぶたが知られていないしアムドの農民はその肉を嫌うと述べる一方、南部ではぶたがなじみ深い動物として扱われていると判断できるいくつもの言及がある。このような文化的差異と本稿で扱ったぶたに関する語形式について、北部に分布するアムドチベット語では決して語形式が豊富とは言えない一方で、南部を中心とする地域に蔵文とは異なる形式が多く用いられている点は、分布地域の面で関連しあうとも考えられるのは興味深い。

Ikeda, Takumi (2004) The Mu-nya language and the Tangut language: Some problems in their comparison, in : 林英津等編《漢藏語研究　龔煌城先生七秩壽慶論文集》383-402 中央研究院　語言學研究所

Les Missionnaires Catholiques du Thibet (1899) *Dictionnaire thibétain-latin-français*, Imprimerie de la Société des Missions Étrangères

Norman, Jerry (1988) *Chinese*, Cambridge University Press

Stein, Rolf Alfred (1962) *La civilisation tibétaine*, Dunod

Sun, Jackson T.-S. (2003) Phonological Profile of Zhongu: A New Tibetan Dialect of Northern Sichuan, in : *Language and Linguistics* 4.4, 769-836

—— (2005) *Special Linguistic Features of gSerpa Tibetan*, unpublished manuscript presented at 38th ICSTLL (Xiamen)

Zhang, Jichuan (1996) A Sketch of Tibetan Dialectology in China: Classifications of Tibetan dialects, en : *Cahiers de Linguistique - Asie Orientale* 25 (1), 115-133

周毛草 [’Brug-mo-mtsho] (2003)《瑪曲藏語研究》民族出版社

華侃 (1983)〈安多藏語聲母的几種特殊變化〉《民族語文》第 3 期 43-46

華侃・龍博甲 [Klu-’bum-rgyal] 編 (1993)《安多藏語口語詞典》甘肅民族出版社

黄布凡主編 (1992)《藏緬語族語言詞匯》 中央民族學院出版社

江荻 (2002)《藏語語音史研究》民族出版社

格桑居冕 [sKal-bzang ’Gyur-med] (1985)〈藏語巴塘話的語音分析〉《民族語文》第 2 期 16-27

格桑居冕・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002)《藏語方言概論》民族出版社

厳木初 [sNying-mo-mtsho] (2006)〈梭磨話共時語流音変研究〉《民族語文》第 5 期 30-35

瞿霭堂 (1991)《藏語韻母研究》青海民族出版社

瞿霭堂等 (1989)〈衛藏方言的新土語—記最近發現的巴松話〉《民族語文》第 3 期 39-61

孫宏開 (1989)〈原始藏緬語構擬中的一些問題—以 “馬” 為例〉《民族語文》第 6 期 12-25

rNam-rgyal Tshe-ring (2001) *Bod-yig brda-rnying tshig-mdzod*, Krung-go’i bod-rig dpe-skrun-khang

チベット語方言名と地点の関係

筆者はチベット語の方言名を蔵文を基礎にしたローマ字表記[40]を用いるため、方言名、方言分類[41]、分布地点および漢語名を以下に対照して示す。

漢語名	方言名	方言分類	分布位置（県、郷について）
熱爾	gZari	ヒャル	若爾蓋県熱爾郷
阿西茸	Askyirong	ヒャル	若爾蓋県阿西茸郷
包座	Babzo	ヒャル	若爾蓋県包座郷
玉瓦	gZhungwa	ヒャル	九寨溝県玉瓦郷
漳扎	gTsangtsa	ヒャル	九寨溝県漳扎鎮（達基寺村/九寨溝外）
樹正	Phyugtsi	ヒャル	九寨溝県漳扎鎮（樹正村/九寨溝内）
阿壩	rNgawa	アムド	阿壩県阿壩鎮
安羌	Anchams	アムド	阿壩県安羌郷
紅原	dMarthang	アムド	紅原県卬渓鎮
水晶	Amphel	ヒャル	松潘県水晶郷（安壁村）
寒盼	Hamphen	ヒャル	松潘県水晶郷（寒盼村）
山巴	sKyangtshang	ヒャル	松潘県山巴郷
十里/西	Ketshal	ヒャル	松潘県十里回族郷（高屯子村/岷江西岸）
十里/東	Thangskya	ヒャル	松潘県十里回族郷（大屯村/岷江東岸）
安宏	Serpo	ヒャル	松潘県安宏郷
紅土	Hongtu/Zhongu	アムド	松潘県紅土郷
玉科	gYokhog	アムド	道孚県甲宗郷
中路	sProsnang	カム	丹巴県中路郷
章谷	Branggo	カム	丹巴県章谷鎮
梭坡	Sogpho	カム	丹巴県梭坡郷
格宗	dGudzong	カム	丹巴県格宗郷
木茹	Morim	カム	道孚県木茹郷
八美	Bame	カム	道孚県八美郷
塔公	Lhagang	カム	康定県塔公郷
新都橋	Rangakha	カム	康定県新都橋鎮
沙徳	Sabde	カム	康定県沙徳郷
祝桑	Grongsum	カム	雅江県祝桑郷
理塘	Lithang	カム	理塘県高城鎮
巴塘	mBathang	カム	巴塘県夏卬鎮
蘇哇龍	Sowanang	カム	巴塘県蘇哇龍郷
党巴	Dangba	カム	巴塘県党巴郷
措拉	mTshola	カム	巴塘県措拉郷

[40]蔵文形式が不明のものは漢語音に基づいたローマ字表記となる。
[41]方言分類はカム、アムド、ヒャルのいずれかを示す。

稲城	nDappa	カム	稲城県金珠鎮
蒙自	Mundzin	カム	稲城県蒙自郷
沙貢	Sagong	カム	郷城県沙貢郷
尼斯	Nyersul	カム	郷城県尼斯郷
郷城	Chaphreng	カム	郷城県香巴拉鎮
青徳	Phrengto	カム	郷城県青徳郷
青麦	Phrengme	カム	郷城県青麦郷
洞松	gDongsum	カム	郷城県洞松郷
然烏	Ragwo	カム	郷城県然烏郷
熱打	Rwata	カム	郷城県熱打郷
茨巫	Tsiu	カム	得榮県茨巫郷
得榮	sDerong	カム	得榮県松麦鎮
徐龍	Zholung	カム	得榮県徐龍郷
日龍	Zulung	カム	得榮県日龍郷
麦日	Muli	カム	木里県麦日郷
唐央	Thangyang	カム	木里県唐央郷
大中甸	rGyalthang	カム	香格里拉県大中甸郷
東旺	gTorwa	カム	香格里拉県東旺郷
尼西	Nyishe	カム	香格里拉県尼西郷
奔子欄	sPomtserag	カム	徳欽県奔子欄鎮
羊拉	gYagrwa	カム	徳欽県羊拉郷
徳欽	nJol	カム	徳欽県升平鎮（阿墩子）
雲嶺	Yungling	カム	徳欽県雲嶺郷
燕門	Yanmen	カム	徳欽県燕門郷
巴迪	Budy	カム	維西県巴迪郷
拖頂	Toding	カム	徳欽県拖頂傈僳族郷
霞若	Xiaro	カム	徳欽県霞若傈僳族郷
維西	Melung	カム	維西県永春郷
塔城	Tacheng	カム	維西県塔城郷

[付記]

筆者による現地調査については、平成 16-18 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (S)「チベット文化圏における言語基層の解明」（研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001）の援助を受けている。

Nom de ‘porc’ des dialectes tibétains parlés dans le couloir ethnique à l’ouest du Sichuan

Hiroyuki SUZUKI

sommaire

Cet article traite l’analyse du système lexique concernant le ‘porc’ des dialectes tibétains (khams, amdo et shar) parlés dans le couloir ethnique à l’ouest du Sichuan. Le tibétain écrit possède la seule morphème qui représente ‘porc’ *phag*, et en tibétain oral aussi, en général, on utilise ce mot et les mots dérivés de celui-ci.

Mais dans les dialectes tibétains (khams, amdo et shar inclus) parlés dans le couloir ethnique à l’ouest du Sichuan, il y a beaucoup de mots qui ne dérivent pas de la morphème *phag* pour représenter le verrat, la truie et le cochonnet.

L’auteur tente d’analyser les mots précédés qui sont différents sur son origine lexique, et d’expliquer sa distribution et son étymologie en utilisant la carte linguistique.

Les exemples caractéristiques des mots verrat, truie et cochonnet sont suivants :

1. le verrat (*pho phag / phag pho* en tibétain écrit)

pʰo wa	pə liʔ	pʰa pʰɑʔ
pʰɑʢ wo	pʰaʔ jaʔ	etc.
pʰaʔ seʔ	sʰe wa	

2. la truie (*mo phag / phag mo* en tibétain écrit)

mo wa	pʰaʔ ji ma	pʰi gɛ
jĩ mɑ	pʰaʔ ma	etc.

3. le cochonnet (*phag phrug* en tibétain écrit)

pʰɯ kʰa	pʰjeʔ ɣi	pʰje
pʰe jiː	pʰɐː ruʔ	ʔa gu
pʰe ʈʰuʢ	puː / pə ɦu	ʔa ŋɯ
go ɖiːʔ	pe ɖɤː	etc.